

東京大学

理学部広報

第5巻 第2号 昭和48年4月5日

2月理学部会合日誌

- 7日(水) 10:30~12:30 人事委員会
14:00~16:00 主任会議
- 12日(月) 14:00~16:00 理学系研究科委員会
- 14日(水) 13:00~18:00 教授会
- 23日(金) 15:00~17:00 アイソトープ委員会
- 26日(月) 12:30~13:40 学部長と理職の定例交渉

3月理学部会合日誌

- 2日(金) 10:30~11:30 会計委員会
- 7日(水) 10:00~12:00 会計委員会
10:30~11:30 人事委員会
- 12日(月) 14:00~18:00 理学系研究科委員会
- 14日(水) 13:00~17:00 教授会
- 22日(水) 14:00~15:00 主任会議
- 26日(月) 12:30~13:40 学部長と理職の定例交渉

前回の教授会において小平現学部長が辞意を表明されたことに基き、今回選挙が行なわれた。その結果、植村教授(物理, 現評議員)が選出された。任期は4月1日から2年間である。なお、これに伴って評議員の補欠選挙が行なわれ、下郡山教授(植物)が選出された。

- 8. 地球物理研究施設長の選出
投票の結果、永田教授が選出された。
- 9. 情報科学研究施設長の選出
投票の結果、高橋(秀)教授が選出された。
- 10. 図書行政商議会報告
- 11. その他

なお、休憩時間に、化学館中庭において、記念写真の撮影が行なわれた。その後、学部長から今月末で停年退官される教授の紹介があり、秋田教授および岩生教授が、挨拶の言葉を述べられた。

最後に、久保教授の提案で、小平学部長の約一年半にわたる御努力に対して、出席者一同が拍手を送った。

教授会メモ

3月14日(水) 定例教授会
於 理・4号館会議室

1. 前回議事承認
2. 人事異動等報告
3. 卒業学生の成績決定について
4. 研究生の入学について
5. 人事委員会報告
6. 会計委員会報告
7. 理学部長候補者の選出

教官人事異動(除退・休職)

氏名	教室	異動内容	発令年月日
安藤恒也	物理	助手に採用	48.4.1
羽田野正隆	地理	助手に配置換	48.4.1
岡本和夫	数学	助手に採用	48.4.1
大島利雄	数学	助手に採用	48.4.1
伊吹山知義	数学	助手に採用	48.4.1
石橋克行	地物	助手に採用	48.4.1
梅沢喜夫	化学	助手に採用	48.4.1

氏名	教室	異動内容	発今年月日
大野 哮司	生化	助手に転任	48. 4. 1
西郷 和彦	化学	助手に配置換	48. 4. 1
奈良坂 紘一	化学	助手に配置換	48. 4. 1
川上 幸男	植物園	助手に昇任	48. 3. 1

地球物理学科 (4名)

大畑 哲夫 松崎 孝文 石戸 恒雄
沢井 哲滋

化学科 (18名)

小柳 和子 木村 順治 米田 好文
鳥居 功博 細田 健治 山田 正理
石川 清文 卜部 恭一 小原 正博
大内 英良 金崎 英二 佐藤 一博
西沢 節林 輝幸 坂東 博
松井 良夫 松本 良夫 脇村 善一

生物化学科 (5名)

川原崎 恭子 津田 正明 衛藤 雅昭
竹松 英明 永元 則義

生物学科 (植物学) (5名)

伊藤 真弓 今野 夏郎 三室 守
水智 彰 福本 康子

地学科 (地質学・鉱物学) (3名)

鈴木 登岡 本志 陽西 文人

地学科 (地理学) (5名)

小浜 正道 桑畑 広久 永井 信夫
森 正樹 浅野 武志

昭和 48 年 3 月理学部卒業生氏名

(120名)

数学科 (37名)

高遠 節夫	青木 和男	加藤 一久
小久保 良夫	佐藤 秀樹	坂本 純一
中村 憲	森 雄二郎	会津 守
秋山 信和	荒井 晴仁	宇佐 美陽子
江部 幸夫	遠藤 富士雄	大林 千一
金丸 眺夫	川井 洋二	川鳥 俊雄
北田 均	栗原 章	佐藤 文広
榊原 一実	東海寺 まゆみ	田原 秀敏
土屋 信雄	林 幹雄	本多 真理子
松下 修男	山田 義雄	赤萩 進一
荒川 恒徹	江口 恵子	近藤 道明
瀨野 三子	玉田 善英	
吉川 俊		

物理学科 (41名)

市岡 芳夫	桜井 穆	高野 安正
藤井 京子	浅川 信幸	有沢 博
犬島 喬	上田 和夫	江上 洋一
江里 口良治	小沢 孝好	尾内 理紀
加藤 幸男	鎌田 進	小穴 孝夫
小西 憲俊	小山 和夫	佐井 文憲
瀨川 寛	田中 早苗	滝川 幸夫
土井 恒成	長野 吉伸	二反 田文雄
西岡 英寿	長谷川 洋一	樋口 行平
平林 繁一	深谷 潔	三浦 陽子
宇野 恵一	栗田 信一	近藤 幹元
田中 流敏	鶴見 陽隆	寺島 文雄
安田 英且	真山 本真	

天文学科 (2名)

西城 恵一 金沢 輝雄

昭和 48 年 3 月 29 日
大学院修士課程修了者氏名

(217名)

(理学系研究科)

数学科 (26名)

伊吹 山知義	池上 棟夫	石川 洋文
大島 利雄	鍛冶 明子	加藤 昌英
川崎 徹郎	河部 裕樹	木村 達彦
北川 源四郎	後藤 滋一	佐藤 雅彦
酒井 文雄	坂本 幸一	田中 健一
長崎 憲一	西原 明	平野 照比古
三木 博雄	御前 憲	三輪 哲
宮川 鉄朗	宮本 泉	
谷島 賢二	吉田 正章	

物理学 (53名)

井田哲雄	池畑誠一郎	板野肯三
小貫明	大川房義	岡田成文
岡村良	金田行雄	神永真朗
川端節弥	久木田文夫	草薙秀雄
小泉大	小林功	小林克己
小林弘	佐々木隆	佐々木進
斎藤幸夫	笹尾登	静谷謙一
篠原勝	柴田正和	島田徳三
鈴木隆	住明正	田島俊樹
田中文彦	高城重彰	滝沢美代子
橘秀樹	寺山啓進	戸嶋信幸
友田敏章	南祇建	内藤豊昭
永吉秀夫	仁木清	西田信彦
西川公一郎	野々村久雄	林秀知佳
樋口光潤	日高啓晶	二川厚徹
間田寿和	美宅成和	水野通晃
宮崎幸次	村山健次郎	安村

天文学 (6名)

安藤裕康	岡村定矩	出口修至
根本清一	畑中正樹	藤本正行

地球物理学 (19名)

伊藤久男	川崎一郎	工藤和男
藤夏雄	斎藤和男	藤憲雅史
中村正博	野田彰章	井孝典彦
藤本充宏	八木健彦	山田健一
松浦俊正	山下輝夫	山科健一

化学 (38名)

綾部真一	新井和孝	飯田逸夫
石井文憲	大沢吉直	大海藤彰
岡村三夫	岡本寛夫	木村宗明
喜多野公夫	小池康夫	小島敬和
国堀悦英	五味明彦	合田公志郎
小白崎英夫	土屋徹人	高橋好美
竹内保弘	島中直照	中村茂雄
樋口正弘	日野照純	福島和夫

松崎章好	宮寺達雄	本村碩敏
百瀬博夫	森岡義幸	八木幹雄
山下雅道	吉田邦夫	

生物化学 (16名)

伊井一夫	池永裕	井上順雄
小野哲也	大野淑子	沖花裕行
栗山了子	小松みづほ	島崎幸雄
嶋田敬三	高山豊	出口和雄
早川進夫	藤田忍	松本幸次

動物学 (7名)

猪原節之介	岸本健雄	佐原雄二
角谷まゆみ	中村泉	本川達雄
森岡清和		

植物学 (7名)

白田秀明	金子節子	神谷明男
佐藤直敏	原山重明	宝月岱造
森田竜義		

人類学 (3名)

岩野泰三	口蔵幸雄	福島靖夫
------	------	------

地質学 (10名)

荒井章司	浦辺徹郎	越後格之
小野進夫	奥田義久	川崎正士
豊原富士夫	西村年晴	福山博之
水田敏夫		

地理学 (4名)

海津正倫	増子洋一	宮口侗廸
山川充夫		

相関理化学 (23名)

阿部篤史	有沢健治	石井哲郎
市原裕	宇佐美俊郎	宇田川正和
遠藤真広	小沢清智	木村和正
黒川隆志	黒田研一	小宮山裕行
桜井勝夫	武田重明	武田紘樹
中瀬純	野村明	林島静雄
伏木八洲	水谷広浩	宮島
山本啓一		

理学博士学位授与者

昭和48年2月12日付授与者

専門課程	氏名	論文題目
物理学	森 昭彦	低エネルギー中性子の ^{12}C による散乱の微視的記述
生物化学	松野 哲也	Some Effects of a Hypothalamic Factor on the Biosynthesis and Release of Growth Hormone (視床下部性因子による生長ホルモン生合成および分泌の調節機構について)
学位規則第3条2項該当	藤原 正彦	不定方程式における局所大局原理及解の有限性 (I) 代数方程式における Hasse の原理 (Hasse principle in algebraic equations) (II) W. M. Schmidt の定理のいくつかの応用 (Some applications of a theorem of W. M. Schmidt)
同	大野 哮司	棒状ウイルスの構造形成に関する生化学的研究
同	佐藤 壮郎	Genetical Study of the Uchinotai Deposits, Kosaka Mine, Akita Prefecture, Japan—A Possible Model for the Kuroko Mineralization (秋田県小坂鉱山内の岱鉱床の成因的研究—黒鉱々化作用の一モデル)

昭和48年3月12日付授与者

地球物理学	林 幹治	VLF and ELF emissions in high latitudes, especially their generation and modulation in the magnetosphere (磁気圏 VLF・ELF 自然電波の発生とその動的特性)
物理学	松下 貢	Magnetoabsorption of Indirect Exciton in AgCl and AgBr (塩化銀及び臭化銀における間接励起子の磁気光吸収)
動物学	亀井 碩哉	On the mechanism of the stimulation of the lymphocytes by Phytohemagglutinin, especially on the Phytohemagglutinin-binding site of the lymphocytes (フィトヘムアグルチニンのリンパ細胞増殖刺激機作, 特にリンパ細胞のフィトヘムアグルチニン結合部位について)
物理学	皆川 功	A Theory of the Mobility of the $(\text{H}_3\text{O})^+$ Defects in Ice Crystals (氷の $(\text{H}_3\text{O})^+$ 欠陥の移動度の理論)
地球物理学	杉原 伸夫	Wind Induced Motions in a Stratified Ocean (成層海洋において風によって惹き起こされる運動)
学位規則第3条2項該当	山田 勲	Magnetic Properties of K_2CuF_4 —A Transparent Two-Dimensional Ferromagnet— (K_2CuF_4 の磁性; 透明な二次元強磁性体)
同	金子 晃	On continuation of regular solutions of partial differential equations with constant coefficients (定数係数偏微分方程式の正則解の接続について)

学位規則第3 条第2項該当	吉川 宣治	In-Beam Study of ^{136}Ce and ^{138}Nd Isotones with $N=78$ (中性子数 78 核の ^{136}Ce , ^{138}Nd のインビームスペクトロスコピーによる研究)
同	内藤 周式	Mechanism of Hydrogen Transfer Reaction over Some Solid Catalysts (固体表面上での水素移行反応の機構に関する研究)
同	大出 桃子	ウサギの海水適応と腸における水及びイオンの吸収機構
同	野田 幸一	ヒドラにおける形態形成—特に芽体形成と解離細胞の再構成について (The Study of the Morphogenesis in Hydra with Special References to the Budding and the Reconstitution of New Individuals from Reaggregates of Dissociated Cells)
同	藤井 直之	Thermal Diffusivity of Rocks under High Pressures and Temperatures (高温・高圧下の岩石の熱拡散率)
同	森川 尚威	芳香族炭素化合物の反跳トリチウム化

昭和 48 年 3 月 29 日博士課程修了者

専門課程	氏名	論文題目
数 学	大脇 信一	線型微分方程式の一般境界問題
物 理 学	黒沢 和寿	KI_3 崩壊—形状因子 $f_-(t)$ が $1/t$ の極をもつ場合—
同	江沢 潤一	カレント相互作用におけるパートン模型の場の理論的公式化
同	鹿兒島 誠一	^4He の臨界光散乱の研究
同	吉福 康郎	量子力学の基礎的な分野に関する一連の考察
同	矢崎 茂夫	多重発生領域と位相空間の端の領域における一粒子分布
同	中村 健蔵	電子と ^{27}Al , ^{40}Ca , 及び ^{51}V との準弾性散乱
同	恩田 邦蔵	多原子分子による低エネルギー電子の散乱理論
同	鷲見 昌彦	一様磁場中の進行波を用いた荷電粒子の加速
同	望月 孝晏	ビーム交差を用いた低エネルギーイオン中性反応装置の建設
同	田中 豊一	生体高分子のヘリックス—コイル転移
同	安藤 恒也	強磁場中の二次元不規則系の量子伝導の理論—MOS 反転層への応用—
同	井上 慎一	金属ベリウムの凝集エネルギー
同	小川 徹夫	異方性エネルギーを考慮した S-d 系の基底状態
同	金 久 誠	電子相関と常磁性—不純物帯電子への応用
同	鈴木 直	遷移金属化合物におけるフォノンラマン散乱の理論
同	富永 靖徳	熱雑音測定による臨界現象の研究—特に強誘電的相転点近傍について—
天 文 学	湯 浅 学	高次の項を考慮した小惑星の永年摂動の理論
同	米山 忠興	反応しているガスにおける熱不安定性
地球物理学	青木 豊	堆積物における post depositional remanent magnetization の獲得及びその地球物理学的応用
同	佐藤 良子	高温高圧下の X 線回折実験とその地球物理への応用
同	阿部 勝征	1966 年, 1970 年ペルー地震のメカニズムとその地学的意義
同	十市 勉	磁気圏尾部の構造と力学
化 学	坂口 潮	一重項および三重項を含むスピン系の磁気共鳴
同	川村 春樹	亜弗化銀の研究と有機物アルカリ金属錯体の外部光電効果
同	木村 啓作	有機半導体と酵素の触媒活性

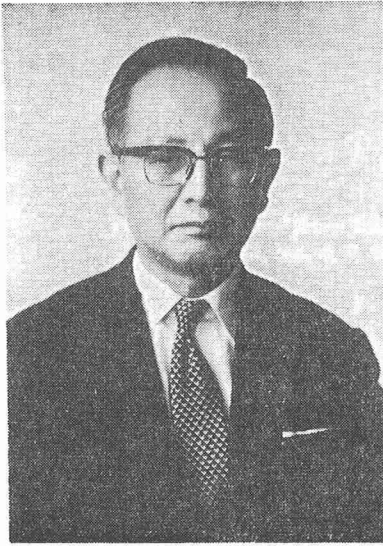
化学	加藤 貞二	ポリピロメリットイミドの分子構造に関連しての力学および物理的性質
同	井上 彰則	励起状態における芳香族化合物の動的挙動に関する研究
同	中山 重蔵	1,2 および 1,3-デヒドロベンゼンならびに一級アミノ基の水素への置換に関する研究
同	落合 為一	有機過酸化物の分解機構の研究
同	黄金 旺	環境物質に関する微量元素の放射化分析
同	小嶋 洋之	フーリエ変換ポーラログラフィー電極反応における非線型応答成分の検出とその解析—
同	大村 陽子	アミン類およびその金属錯体の構造と振動スペクトル
同	小林 茂郎	アルキル遊離基の立体化学
同	坂本 和彦	ヘテラ- <i>p</i> -カルボファン類の分子内部回転と立体配座
同	山田 耕一	振動回転スペクトルによる分子構造の研究
同	宇理 須恒雄	シアン化合物と準安定アルゴン原子との衝突によって生ずる CN ラジカルの発光スペクトル
同	奥山 公平	Li, Na, K, Mg 及び Ca の同位体の濃縮に関する基礎的研究
同	高橋 宏	低レベル X 線スペクトロメータ I の製作及び隕石中の ⁵⁹ Ni の測定
生物化学	柴田 武彦	枯草菌における紫外線傷害を受けた DNA の修復
同	馬淵 一誠	細胞質分裂の分子機構
同	近藤 和彦	ウニ胚における細胞間接着
同	福田 稔	複合多糖の構造と機能の研究—主として特異的グリコンダーゼによる解析を中心として—
同	桂 勲	ガスラ機内でのミオシンと L-メロミオシンの会合
動物学	東 晃史	ウニ卵の受精に伴う膜と原形質の定量的解析
同	森沢 正昭	ペン毛運動における重金属の役割
植物学	長田 敏行	タバコ葉内細胞プロトプラストからの培養細胞クローン誘導法の確立と植物体再生
同	笠毛 邦弘	ヤエナリ胚軸の Mg [±] 依存性 ATPases におよぼすオーキシンの影響
地質学	小川 勇二郎	日本四国東部秩父帯における構造発達史
鉱物学	江尻 公一	MgO の焼結：焼結粒子の成長とその相対的方位関係
同	芳賀 信彦	バナルサイト, BaNa ₂ Al ₄ Si ₄ O ₁₆ の結晶構造及びその長石構造との関係について
相関理化学	里見 大作	脳ミクロゾームの陽イオン結合の研究—イオン交換型陽イオン結合と ATP 依存 Ca ²⁺ 結合—
同	高崎 洋三	アミノアシル-tRNA 合成段階における諸問題の研究
同	岡本 謙一	ポーラロンに於ける経路積分法の拡張と応用
同	福沢 董	アミンによるトリスジベンゾイルメタニューロピウムの蛍光の増感機構

四 教授御退官

秋田康一教授

秋田康一先生は明治 45 年 4 月 8 日熊本県に生まれ、兵庫県立神戸第三中学校、第六高等学校を経て、昭和 6 年東京帝国大学理学部動物学科に入学された。昭和 10

年御卒業後、引きつづき大学院に進まれ、故鎌田武雄教授のもとで動物生理学の研究を始められた。先生の最初の論文は魚類のうきぶくろのガス分泌に関するもので卒業論文でもある。大学院時代はゾウリムシの電解質の研究をされたが、アルカリ金属の微量分析法の開発されていなかった当時における御苦心の程はしばしば先生の懐古談からも窺われた。昭和 13 年台北帝国大学理学部



秋田 康一 教授

(後に理学部) 講師となられ、造礁珊瑚骨格の化学組成、骨格形成に対する光の影響などを研究されたが、在任中召集にあい中断された。昭和 21 年都立高等学校教授、24 年都立大学発足に当り理学部助教授、30 年教授となられ生理学講座を担当された。33 年からは東京大学講師を兼任された。都立大学時代の先生の御研究はショウジョウバエの遺伝生理学的研究、カイコやバッタを材料とした昆虫生化学的研究が主体であったが、昭和 33 年ビキニ水爆実験に端を発して、放射線傷害に関する特別研究班が組織された際、森脇教授に勧められて参画されたことが、以後先生が放射線生物学に進まれてゆく端初となった。昭和 37 年東大に新設の放射線生物学講座担当教授として移られてからは、放射線生物学の研究に専念され、細胞の放射線傷害における SH 基の役割、細胞の放射線感受性決定要因の解析、放射線により誘発される活性分子の作用などについて精力的な研究を展開された。

先生は東大御赴任以来動物学教室における学部ならびに大学院の教育・研究に並々ならぬ熱意を注がれ、一方ではその間放射同位元素委員会委員、原子力研究総合センター運営委員会委員、また 44 年 2 月から 2 年間許議員を勤められ学内行政にも貢献された。また学術審議会専門委員、日本学術会議動物学研究連絡委員会委員、同原子力特別委員会放射線影響部会長、原子力研究連絡委員会幹事、学術振興会委員、放射線影響学会常任幹事を務められ、茨城大学、静岡大学等で非常勤講師として学生の教育指導にも当たられた。最近では放射線障害基礎研究所設立の推進に中心的な役割を果されている。

このように先生は適確な判断力と温厚かつ公正な人柄とで学界のまとめ役としてのお仕事も多く、その日常は多忙を極めたが、少しでも時間があれば、自ら実験室で実験をつづけられ、日に何回も 3 階の教室と地階の研究室の間を走るようにして往復されることは珍らしくなかった。先生は学生時代弓とテニスをたしなまれ、教室や研究室の運営においても常に静動ところを得た適正な指導の範を後進に対して示されてきたことは忘れ得ない印象として、先生の業績と共に永久に残ることであらう。
(動物学教室)

岩 生 周 一 教 授

岩生周一先生は、大正 2 年 1 月 9 日福岡県において生れ、福岡県立中学明善学校、福岡高等学校を経て、昭和 7 年東京帝国大学理学部地質学科に入学された。昭和 10 年地質学科を卒業後、大学院に進み、坪井誠太郎先生の指導の下で岩石学の研究を進められた。昭和 12 年副手、同 13 年大学院を終るとともに、商工省(現在通産省工業技術院)地質調査所に勤務、岩石鉱物の研究、鉱物資源の調査、地質図幅の作製などに従事された。その間、昭和 18 年から同 26 年まで東京大学理学部講師、同 17 年京都帝国大学理学部助教授を兼任され、昭和 25 年 4 月に理学博士となられた。昭和 28 年、市村 毅先生の後任として東京大学教養学部教授に迎えられ、16 年間の長きにわたり教養地学の教育と地学教室の発展に尽力された。昭和 42 年理学部教授を併任、同 44 年理学部



岩生周一教授

教授専任となられ地質学第5（堆積学）講座を担当された。その間、幾多の委員会委員を勤められたほか、昭和43年4月から同年11月まで、大学紛争の困難な時期に評議員を勤めるなど、学内行政の面でも貢献された。

学外では、日本学術会議の地質学研究連絡委員会幹事、太平洋学術研究連絡委員会委員、国際鉱床学連合第7回総会および同第3回組織委員会委員として活躍された。とくに、昭和44年に東京で開催された第10回国際粘土会議においては、組織委員会総幹事として手腕を振られた。現在も日本粘土学会会長として国際学術交流に尽されている。昭和28年には国連アジア極東経済委員会鉱物資源開発地域会議日本政府代表随員として活躍され、同38年から2年間にわたり国連技術援助機構専門技師としてイラン国地質調査所設立に尽力された。また、日本学術振興会の第17、第111、第124各委員会委員として、とくに鉱物資源の新活用面に貢献された。

先生は専攻された岩石学のみならず、鉱床学、堆積岩岩石学など地質学の広い分野にわたり造詣が深い。卒業後4年間に発表された一連の傾家変成岩と花崗岩との岩石学的研究は外国においても高く評価された。その後、明礬石、絹雲母、蠟石、陶石、石膏、珪石など浅熱水性非金属鉱床と、鉱床母岩の変質について精力的に研究を進められた。その結果は「非金属鉱床概論」「粘土ハンドブック」「粘土とその利用」「Clay of Japan」などに集大成されている。とくに、宇久須珪石鉱床、丹波赤白珪石鉱床の研究は、それぞれ陸上地下浅所の温泉、海底温泉に関係した珪石鉱床の例として世界的に評価されている。最近はいランで発見されたポーキサイトの研究に基づいて、九州や北上の秩父古生層中に高温多雨下の風化産物に由来する堆積物の存在することを実証され、秩父地帯の堆積環境と古地理の復元に一石を投じている。

先生は健脚家である。先生の研究の足跡は国内各地はもとより、樺太、北支からイランの4000米級の高山にまで印されている。今でも教室の若手や学生にひけをとられない。また、先生は非常に几帳面で、野外でも、教室内でも詳しいメモを取られ、「岩生メモ」として知られている。先生の実証的で緻密な研究はその健脚とメモから産まれたものであろう。（地質学教室：飯島 東）

島村 修教授

明治もあと4日で終ろうという1912年（明治45年）7月26日に呱呱の声をあげた島村 修先生は最後の明治生まれの教授にふさわしい紳士であるというのが老若大方のみるところである。（以降親しみ易い彼という三



島村 修教授

人称で筆を進めたい。）彼は東京高等学校を経て東大理学部化学科を1937年（昭和12年）に卒業し、当時気鋭の助教授として新しい分野を切り拓いておられた故漆原義之先生の研究室で大学院学生として、臭化水素の不飽和結合への付加反応における酸素効果を研究した。当時は有機化学というもっぱら合成と天然物の構造決定であったが、ようやく有機反応の機構を解明しようという気運が海外ではおこりつつあるときであり、彼は東京のグループの一員として米国や英国のグループと競いながら液相の遊離基反応機構の確立に貢献をはじめた。日米開戦の直前の1941年11月に淑子夫人と結婚した。現代流に言うこの学生結婚は後年彼の研究室で大学院生が結婚する折には前例として引用されたものである。

1942年に理学博士となり、同年助手となった。戦争が激しくなるさなかであったが、現在もしばしば引用される基礎的研究を卒業研究の学生であった方々で行なううちに、ついに横須賀の海兵団に召集されたが、健康上の理由で間もなく幸いにも除隊となった。学生の勤労動員に付き添って群馬に麦刈などをして、実験研究は困難であったが、大いに新しい勉強にはげみ想を練って、わが国最初の有機反応論の概説書の原稿を書き上げ依頼主の出版社に渡したところ、そこで空襲のため灰と化し今日までその出版が断念されてしまったのは、もしもこの本が世にあらわれていれば現在でもこれが学生諸君が最初に手にとる本となったであろうことを考えると、まことに残念である。

終戦後新講座創設に伴い漆原先生が教授に昇任される

とともに彼は助教授に昇任し、ついで 1947 年秋に教授に昇任し合成化学講座（のちの有機第二講座）を担当し、ひきつづいて有機反応論の研究を行なって後進を指導しながら、わが国においてこの分野を今日のように盛んにする支えとなった。

戦後間もなく開始した遊離基的芳香族アリール化の研究は研究室の大勢の人々が参加した大研究で、当時いち早く放射性同位元素を用いて実験の精度を上げ、複雑にみえる結果から遊離基反応を支配する重要な構造上の因子である極性効果と共鳴効果の寄与を分離する原理を確立し、国際的に高い評価を受けた。そのほかアゾニトリルの分解機構、各種の過酸化物の反応機構などについて研究を進めたが、在職中最後の約 10 年では精力的に遊離基反応の立体化学を研究し、この分野に目ざましい進歩をもたらした。また大学院学生のころから光がひきおこす反応に興味があった彼の研究室では、近年には光化学反応の新しい基礎的な立場から探究も行なわれ、有機光学反応論とよぶべき分野が創り出されるようになった。

彼は化学者の中でも化学の基本的問題、すなわち物質の構造と反応性についての問題意識がぬぎんで強い。化学の特徴の一つにその実在性をその時の実験技術では証明できなくても多岐にわたる現象を理解するための基本的な概念を提出することが多い。彼は有機反応を素材として多くの概念と基本的な問題を提起したことを特筆しておきたい。

化学物質を扱う者にとっては元素分析は何よりも重要な仕事の一つであり、諸外国では信頼度の高いドイツやスイスに分析を依頼することも多いが、当化学教室の元素分析室をその技術が世界屈指の水準のものに育て上げたのは彼の大きな功績である。

物事は本場とそのまねとでは一見似ていても本質の違ってしまうことが少なくなく、たとえば本場のフランス料理も日本にくると時として心を忘れた形骸だけが目につき易いのと似ている。彼は科学が生まれた国々での学問のあり方を心得ている一人である。彼は退官まで自分で現象を理解し研究を指導し自分で和文英文を問わずその表現に心を配った個性のある論文を書いた。その優れた英文はふだんのだよまない英語の勉強に負うものであろう。彼は心とか魂を大事にする人で、実験者の魂のこもった結果を尊重した。

彼はその鋭い感性で日々通り過ぎる街角の季節の僅かな移り変わりをも楽しみ、もろもろの芸術や文学を愛する。いつも生協で注文した本やレコードやテープがその部屋にとどけられていたものである。彼は無類の大好き

であり、そのゆえにこそ化学教室の新館ができたときには力をつくして図書室を今日のように整備することができたといえよう。

彼は十年余りに胃の手術をしたが以後ずっと元気であったのはいつも研究室の人々を羨しがらせた夫人の手作りのすばらしい弁当のせいであったかも知れない。停年後の先生にその頭脳のなかに吸収され永い間熟成されたものを著作として世にあらわしていただけたらと思うのはお願いのし過ぎであろうか。

（化学教室：徳丸克己）

中村 誠 太 郎 教 授

先生は、大正 2 年 2 月 27 日彦根に生れ、昭和 16 年、京都帝国大学理学部物理学科を卒業後、京都帝国大学理学部副手を経て、昭和 18 年より東京大学理学部助手、昭和 25 年より同大教養学部助教授になられ、同年 5 月より理学部助教授を兼任、昭和 28 年より同大理学部助教授になられた。昭和 46 年同大教授になられ、原子物理学第二講座を担当されてきた。この間、大阪大学理学部、日本大学理工学部、神戸大学理学部教授等も併任され、本学理学部および大学院における教育と研究のみならず全国の人材を養成された。

先生はまた東大原子核研究所設立準備委員会専門委員、原子力特別委員会委員、原子核特別委員会委員、京大基礎物理学研究所運営委員等をも務められ、国内での研究行政にも大きな貢献をされたのみでなく、ジュネーブにおいて開催された第二回原子力平和利用国際会議に日本政府代表顧問として出席される等、国際的にも大きな活躍をされた。また、国内の若い素粒子論研究者のための奨学会設立に大いに努力された。またナポリ大学、ミュンヘン大学でも研究をされ、国際交流に大きな貢献



中村 誠 太 郎 教 授

をされた。

先生の御専門は原子核物理学および素粒子論であり、ベータ崩壊理論の初期より相互作用の型の研究、中性子の崩壊のスペクトルの分析において大きな貢献をされた。またラジウム E を使ってベータ崩壊において時間反転が成りたっていることをも証明され、ベータ崩壊の研究において世界的な名声を博された。また、素粒子論においても、 $O(4)$ 対称性による素粒子の分類や弱い相互作用の研究に関してユニークな方法を提唱され

た。

先生はまた、スポーツマンでもあり、スキー、スケート（フィギュア）を好まれるのみでなく、精神的にも非常にお若い万年青年であられる。

（物理学教室：猪木慶治）

編集 塩田 徹治
理・1号館 315号室 内線 2866